
星屑と天才

十日

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

星屑と天才

【Nコード】

N8585Z

【作者名】

十日

【あらすじ】

非凡でバカな鳴瀬は目を覚ますと夢の中にいた。同じく夢の中にいたのは、天才である切れ者、名智だった。

(前書き)

短編のつもりですがちよいちよい編集して書き足します。
書き足したら順に前書きの方に知らせていききたいと思います。

越えられない壁というのがある。あまりにもあっさりとした、まさにその言葉通りの意味だ。

例えるならば、非才の僕が、天才のあいつに勝てることは無い。それこそ、例外なく。

いつから眠っていたのだろう。というか、どれくらい眠っていたのだろうか。

目を覚ますと、俺はベッドの上で、いつもと何ら変わりなく寝ていた。しかし、寝すぎたかのように体はがちがちとしている。上半身だけ起こすと、はずみで体のあちこちが悲鳴を上げた。

「いってえー！」

「うるさいよ」

不意に、どこからか声がした。聞いたことのあるような、無いような、曖昧な記憶の中に埋まってしまったような声だ。

一瞬だけ忘れていた痛みが走り、また声を上げて背骨を押さえ、猫背になる。するとまた、声がした。

「ここは僕の家なの。うるさいと棄てるよ」

かつかつと音を立てて俺の目の前に現れた人影は、よく知ったものだった。

「……はあ？」

状況が呑み込めない俺に、その人物は鋭い瞳で一瞥をくれた。

真っ黒な髪はきれいに揃えてあり、さらさらとした印象を受ける。端正で小さな顔立ちも相俟って、攻撃的なツリ目さえなんとかすれば、まるでアイドルのような風貌だ。

「……棄てる？家？どういっこっちゃ」

「その通りの意味だよ。それが理解できないのなら、それまでの人間だよ。バカってことだけだ」

あまりに失礼な物言いだっただが、それに反論できるだけのボキヤブラリーなど持ち合わせていない。もちろんそれが癪に障らなかつたかと言えばうそになるが、今は仕方なく言葉をのむ。

「・・・で、なんで俺は天才さんの家にいるんだろうか」

「さあね。知りたいなら十五時間前の自分に聞いてごらんよ」

見回すと、部屋には俺が座っているベッドと、テーブルとソファ、そして窓とカーペットしかなかった。十畳ほどの狭い部屋に、それだけがただ押し込まれているように、ひどく殺風景な部屋だ。他の家具はおろか、タンスなんかも見当たらない。代わりにクローゼットが見えるが、ここはアパートか何かの一室だろうか。

俺が「天才さん」と呼んだ人物は、名智という男だ。

えらい頭のキれるやつだということだけは知っているが、具体的に何が、ということまでは知らない。ちなみにいうと話したのは今日が初めてだ。

それでも俺が一方的にこいつを知っているのは、こいつがあまりにも有名だったからである。

「十五時間？」

「君が来た時間・・・眠った時間でもあるけれど」

話が見えない。すべて一方的のように聞こえてしまう。

テーブルに対して平行に並ぶソファに座り、名智は悠々とコーヒを飲んでいた。

「君、バカなの？」

「分かりきったことを何度も言うてくんじゃねえよ・・・」

「まあ、バカじゃなかったらさっさと出て行くのが普通だよね」

棘のある口ぶりで、早く出ていけとばかりにコーヒを口に含んだ。俺からは横顔しか見えないが、不機嫌そうなのは雰囲気です。

「ここは、どこだ？」

「二丁目だよ」

意図を汲み取ったのか、さらりと返事が戻ってきた。

「二丁目なら、自分の家までそう遠くはない。」

「もちろん、現実世界ではなく、空想のね」

「……?」

もうキャパを超えた。そんな気がした。

この男は何を言っている? どういう意味合いを含んでいて、これはドッキリか何かなのか?

「ここは空想の世界なんだよ。時間という概念がない、あっけらかんとした世界」

「……バーチャル?」

「さあ。夢じゃないの?」

仮に夢だとして、なぜ目の前の男はこうもあっさりと受け入れて、悠長に構えているのだろう。

「明晰夢だと思えばいいよ」

そういわれたが、俺には「メイセキム」が理解できない。なんだそれは。新しいゲームの名前か。

「……なにそれ」

「……面倒な人間だね」

名智のため息が響いた。

途端に、部屋の中は静まり返る。

「っていうか、なんで夢なのに自分の部屋なんだよ」

「ここは僕が先に来た。つまり僕のものだ」

「ジャイアンかよ」

「僕からすれば君の方がジャイアンだよ。態度のでかさと言い、なにも理解しようとしなご都合主義のバカさとい」

また、名智からため息が漏れる。つられて俺もため息をつく。どうしてこうなったんだよ。

「メイセキム」とやらが理解できないまま、天才くん（さん付けはなんか気に食わなかった）はそのあと、普通にベッドから俺を引きずり、そのまま布団をかぶってしまった。

冷やかな床に落とされた俺は、ただソファから唯一ある窓の外を見つめていた。

思えばこの部屋に、出入り口はこの窓しかない。部屋と言っても、本当にワンルームしかなく、玄関もなければ、他の部屋もない。ぬるいものだが、密室と言って差し支えない気がする。

そういえば、俺の紹介をしていない気がする。

俺の名前は鳴瀬という。別に覚えなくてもいいが、名前は陸だ。因みに高校生だ。

布団にもぐっている男は「名智」ということしか知らない。同じ高校の同級生だが、それが苗字なのか、名前なのかもわからない。バカと天才の壁は高いものだ。何も知らないのだから。

「うーわー、めっちゃ快晴じゃん。でもこれ夢なんだろうー？」
意味のない独り言だ。意味はないが、なんとなく会話をしているようで俺だけ楽しい。

外は、雲一つない青空が広がっていた。太陽は天頂より西だか東だかに傾いていたが、時間なんてわからない。この部屋には時計もない。そりゃそうか、時間の概念がないと言っていたいな。

「あーあー、なんなんだよここ」

「君さあ、煩い」

布団から目だけを出して、攻撃的に名智が睨んでくる。

「へいへい、じゃあ小声にするわ」

「そうじゃない、黙ってる」

そういわれて、仕方なく黙っていることにした。

「二丁目って、なんだ？」

「名前だよ。番地」

たぶん俺たちの会話は、噛み合っていない。うすうす気づいていたが、噛み合っていない。

空が闇に囲まれたころ、名智はそのそとベッドから這い出してきた。

「・・・夜？」

「ってかここ、電気とかないのかよ」

「さあね。コーヒーならあったけど」

「ねんで電気が無くてコーヒーはあんだよ」

そういえば、なにか違和感を感じていたが、それは電気がないことによるものだったのか。納得して、ソファごろんと横になる。

濃紺に染まり始めたと思った空は、いつのまにか真っ黒になっていた。同時に、一度目を閉じると、あたりが真っ暗になって、何も見えなくなる。

「うわっ、暗っ」

「煩い」

不意に、鼻につくコーヒーの匂いがした。温かみを帯びた臭気が、視界のままならない暗闇で嗅覚だけが敏感にとらえた。

「っていうかよ、お前、時間分かるんじゃねえのかよ」

「分かるよ。今は関東地方の冬の夕方六時半」

「やけに細かいうえに、どこか胡散臭い。」

「時間を身につけておけば、時計なんて必要なくなる」

「じゃあ、あれか。五秒ゲームなんかは負けなしか」

「そもそもそんなゲームはやらない。だけど、有利だろうね」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8585z/>

星屑と天才

2011年12月27日00時53分発行